

Steinbeck 研究

森 政 勝

(7) *The Log from the Sea of Cortez, 1951*

この航海日誌には *The Narrative portion of the book Sea of Cortez with a profile "About Ed Ricketts"* という副題が付いている。60ページにわたる *About Ed Ricketts* の部分は亡き親友への追悼記としては最上のもので、正直、率直、非感傷的、厳粛である。Steinbeck はこの中で自分が真理と考えるものを記録しており、複雑な逆説的人物——かつては献身的な博物学者であり、偉大な教会音楽の愛好家であり、淡白で熱心な感覚論者であり、非常な好奇心と恐るべき正直さをもつた思想家であり、科学者、好色家、聖人の寄せ集めのような人物（Steinbeck の言葉を用いれば half-goat であり half-Christ であり、しかも大きな愛情をもち人からも大いに愛された）である Ed Ricketts のことなら何でも知っているというような思い上がった書き振りは全くしていないのである。Steinbeck は、つむじまがりて信じられないような無遠慮な話を書いて、Ricketts のおかしな大きな失敗や、好ましいと思われる性的対象ならどんなものでも理想化できる Ricketts の力量を説明している。現実の女は Ricketts の想像的再創造にとつては単なる原料に過ぎない。女の顔や姿は Ricketts が意のままの美のあらゆる外観を附与できるマネキンのようなものであり、女の心や感性は彼が希望できる程度に微妙であり、感受性があり、敏感であり——詩的であり、知的である、と彼は容易に確信する。Steinbeck は Ricketts がかつて、ある売春婦——Monterey のいわしとりの漁夫が漁のない期間を過ごすためにかかえていた売春婦、すなわち a small but unfragile blonde of endurance and experience に自分の無意識的な芸術的才能を働かせた様子を物語っている。

この追悼記の中で Steinbeck は Ricketts の死の実情を叙するに当つて、彼自身のことはもちろんのこと読者のことも決して容赦はしていない。Ricketts は夕方 Cannery Row にある研究所を出て自分の自動車に乗り近く鉄道の踏切まで行つたが、そこで列車にひかれてしまつたのである。大勢の人がそこへかけつけてみると Ed's skull had a crooked look and his eyes were crossed. There was blood around his mouth,¹⁴³ and his body was twisted, distorted — wrong, as though seen under an untrue lens. というのであつた。彼は病院に運ばれたが間もなく死んだ。しかし、この文章の最後に出てくる Ricketts についての思い出は明るく書かれている。The picture that remains is a haunting one. It is the time just before dusk. I can see Ed finishing his work in the laboratory. He covers his instruments and puts his papers away. He rolls down the sleeves of his wool shirt and puts on his old brown coat. I see him go out and get in his beat-up old car and slowly drive away in the evening. I guess I'll have that with me all my life.¹⁴⁴ このようにして心の友の死をいたみながらも、その人となりを余すところなく温かい友情と信頼の念をもつて描いている。

Sea of Cortez の部分は Ricketts と共に Western Flyer 号に乗つて3月12日から4月13

日まで、Gulf of California の生物を採取に行つた時の紀行文ではあるが、その中には exotism と詩が Steinbeck 独特の筆で見事につづられ、一篇の科学書——実に該博な科学記事が出てくる——を読むような固苦しさをなくしてくれる。行間に流れる Steinbeck の人間味は読者の心をほのほのさせる。随所に生命論、自然論、文明論、運命論ともいうべきものについての彼の哲学が説かれているが、へたな小説を読むよりはるかに興味深いものがある。The laws of thought seemed really one with the laws of things. こんな言葉一つを取上げてみても、心と物の関係や人間と自然の連関に Steinbeck がどんなに深い思索をしていたかがうかがわれる。

(18) *East of Eden*, 1952

この作は文学的神話の重要な意義をもたすようにと意図されたもので、534ページ (Bantam Books 版) の大作であり初めは *Salinas Valley* と呼ばれた。この計画は「若い二人のむすこのために先祖が南北戦争直後西方へ移住し Salinas の谷へやつてきてからの詳しい記録を物語の形式で書くことであつた」¹⁴⁵ がやがてそれは Cain と Abel の神話となつてしまつた。表題は And Cain went out from the presence of the Lord, and dwelt in the land of Nod, on the east of Eden.¹⁴⁶ から出ているが、この表題が暗示するように、このテーマは聖書の創生記に出てくる Cain と Abel の物語——この作では Salinas が舞台になつている——の中に象徴されるエイ知と無知、光明と暗黒、つまり善と悪との闘争である Trask 一家の三代 (Steinbeck 自身の生いたちも含めている) が大部分は母方の家族、すなわち Hamilon 家の精密で事実に即した説明になつているが、これは Cain と Abel の物語の再生であり、また一つの象徴でもありグウ (寓) 話でもある。

The Grapes of Wrath では社会的批評家であるとして歓呼して迎えられ、それに続く諸作では人気取りのメロドラマ作家であるとしてしばしば非難されたこの著者も、この作では——ある批評家は「この小説で Steinbeck は始めて道徳的テーマと取組んでいる」¹⁴⁷ と言つている——道徳論者と見なされることを自ら欲したと明言している。彼がこのようなテーマと取組んでいるのを見た人は、これが時代の明るい希望のもてるしるしであると感じたかも知れないが、不幸にして、この作では、いかなる美も、また、いかなる悟性も、動物性、暴力、邪悪などに取りつかれて、ほとんどその姿を見せていないのである。この作は人類の最も根元的ななぞを取扱つているが、このなぞとは、宇宙における悪の存在であり、神の目に映るのろいの原因である。Steinbeck の解説は要するところ原始的、楽観的で、人類は神に棄てられ悪との戦いをやるのであり、神は人間の父であるアダムを通じ、回復の希望や善悪の選択を自由意志という賜物として提供してくれるのである、ということになる。

Nearly everything I have is in it.¹⁴⁸ と言つて Steinbeck はこの作にすべてを打ちこんでいるようであるが、しかし、わたしの持てるすべてのものとあるのはアメリカの持てるほとんどすべてのものとすべきではなかつたであろうか。何の飾り気もなく非常に抽象的な言葉で述べられているこの作の命題の第一は、善と悪は絶対的なもので、相対的なものではないということ。Steinbeck が善悪の問題に深い関心をもつたのは、習俗的、道徳的、哲学的な意味においてではなく、生活に生気を与える原則としてであつた。第二は、善悪のいずれを選択しようとする人間の自由で、人間は遺伝、環境、その他いかなるものの犠牲にもならないということである。各ページにみなぎる喜劇と悲劇、神話——J. W. Krutch によれば、この作は物語を単に徳道化したのではなく、一つの神話を再び作つたのである——¹⁴⁹と現実の大胆な混

合は、感情と形式のちぐはぐなことを忘れさせるほど巧みな構成となつている。*Cannery Row* やその続篇ともいふべき *Sweet Thursday*, 1954 においては、気ままに人物の喜劇的な研究をやつた Steinbeck は、Tom Joad (*The Grapes of Wrath*) や Adam Trask (*East of Eden*)——彼らは宇宙の真理に反するこの世の道德問題で経験を測ろうとした——によるよりも、道德などは持ち合わせず、のんきで、ばかげた所のある Doc やその友人たちによつて長く記憶されるであろう。というのは、Steinbeck にとつては、人間は生れながらに善良であり善良な者だけが景気よく暮らす力があり、このような力を持つ者には精神的複雑さや鋭敏さを欠く者が多く、しかもこのような欠点は生命力、生活力、順応性などで補われている、と思われるのであり、Thoreau と同じように、人生を「ある片隅に追いやり、それを最低の関係にまで持ちこみ、それが卑しいものであることがわかれば、その全的にして純粋な醜悪を取り去ること」¹⁸⁰を勇敢にやつてのけたからである。

「われわれは弱く病氣勝であり、醜悪でケンカ早い、それがわれわれのすべてであると¹⁵¹したら、われわれは何千年もの昔、地表から姿を消していたであろう。これは真実である」というのが、Steinbeck の spirit であり belief である。彼は *The Wayward Bus* では、人間はこのようなものではあるが六シリンダーの世界は継続する、と信じており、*Burning Bright* では、人間が存続する限りどこにおいても万人は不朽である、と説きながらも、*East of Eden* では、人間には善悪を選択する力があることを熱心に述べているのである。

さてこの作中の行動は三つの面から考えてみなくてはならない。第一は個人的なもの。第二はある型、すなわち、アメリカの文化発展のある様相を照明し、それを代表する型を現わすもの。第三は象徴的なものである。この第三のものが最も重要である。*Cup of Gold* が書かれて以来、*East of Eden* で始めて Steinbeck は本質的には個人——これは彼の小説の素材としては別個に存在し、重要性をもっている——であるとされる人物を取扱つている。というのは、彼は人物を通じてテーマの確立をはかろうとするのであつて、構造や言葉を通じてではないからである。ところが彼はこの方法では見事に失敗している。それは、彼の取扱う人物が、個人としては信用ができる、とか、型としては効果的であるとかいうのではなく、その双方の不調和な混合物になつているからである。なお Steinbeck の作が最上と思われる時はいつもそうであるが、彼の作中人物は exhibits であり cases であり specimens であるにすぎないのである。この作には Cathy という女が出てくる。彼女は家や両親を焼き、義兄弟と不義をし、家庭生活を捨てて最古の職業を再開するが、このような女を実際的に生存させ、かつ小説の中心人物にすることは非常に困難である。この Cathy は全く外側からながめられているだけで、なぜこのような行いをするかは読者には知らされていないのである。Steinbeck には真の悪人、真に不愉快な人などを書く能力はない。このことは多くの批評家の言う通りである。この作をうまく引張つてゆく一つの工夫としては、二つの家族を接触させることと、道德論に筋の客観的な詳細を混ぜ合わせるため“T”という語り手を使用していることである。これは Thackeray のやつたと同じことである。ところがこの“T”が“me”と John, “my”と“we”などと混乱してしまい、Thackeray のように事件の外に立ち、道德物語の注釈者とはなり得なかつたためこの工夫も失敗に終つてしまつた。なおこの作には構成とテーマの欠点の外に用語の欠点が目立つ。これは *Burning Bright* におけるように、手法としての言語の探索が比喩(喩)的なものに傾きすぎたということである。この散文には偽装詩があり、ばらばらの題材を組立てることのできない不注意と、その題材強調

の無能力とが散在している。彼には人間に対する寛容な関心がありながら、その行動を進める駆動力が十分でないために、この作構成の諸要素がばらばらになると、W. M. Frohock も言っている。この作にも媒介物としてのスケッチと短章があり、作者はそれぞれの主題に専念しながらも、全体の作の主題に専念するという彼の得意とする行き方は見られる。このような技巧は折衷的見解を生み出しているばかりではなく、広範囲な想像——彼の想像には幾多の欠陥があるといわれる——の自由を与えている。しかし、見解や調子の取扱いはどうやらこの作の破タン(綻)を防いでいるようである。

この作はテーマや効果の単一性には余り熱を入れなかつたこと、地方的、社会的ないしは政治的な強調を避けていること、などでは初期の作とは異なる。彼はある物語を中心とし、その周囲で歴史と神話の幻想曲を奏でることによって不可思議で独特な作品を書いたのである。M. Shorer は、この作の思弁的記述と小説的表出（これは感傷主義とも呼びうる）との間ゲキ（隙）について述べ、更には感傷的メロドラマの要素を指摘しながらも、この作は、Steinbeck の最上作となりうる、とたたえている。

この作は分量からすれば最も野心的なものであろうが、*In Dubious Battle* や *The Grapes of Wrath* に取つて代わることはできない。これは余りにも広大な規模で計画されたため、規模だおれの感がある。しかし、この作は作者ががっちり取組み、高い目標をねらい、自らのあらゆる精力、才能、真剣さ、情熱を傾けており、彼の傑作といわれる *The Grapes of Wrath* よりも明確に自己や素材をハ(把)握している。最も非友好的な批評家でさえ、Steinbeck が書き得た最も野心的な作品であることは認めないわけにはいかないであろう。彼は作中の多くの材料にある秩序を持たせようとしたが失敗した。彼は余りにも多くのことを言おうとしたために創作的に専念することはできなかつた、というのが多くの書評家の一致した意見である。*Time* の書評家は…perhaps Steinbeck should have stuck to his original idea of telling just the family history. As it stands, *East of Eden* is a huge grab bag¹⁵³…と言っているが、まさにその通りであろう。なお彼の最上作は作者が憤りを感じ、不正を見る時に限る、という Frohock の言葉も忘れがたい。この作の舞台は全アメリカの半分にわたり、時代もほぼ半世紀に及び、しかも長大な作品である。これが家族小説であるという点では T. Mann の *Die Buddenbrooks* や Roger Martin du Garde の *Les Thibault* を思い起こさせるが、この二者とは似てもつかないものであり、本当は sloppy な本ではない、という作者自身の弁明にもかかわらず、そのまともな方はほめたものではない。

この作は一般大衆には受けたようである。また Elia Kazan によつて映画化されそれもまた受けたようである。その原因の一つは「悪たれた heroine」が出てくるからであろう。この女主人公は今までのアメリカ小説中で最もいまわしいものであるが、アメリカの読者は由来 Scarlett O'Hara で始まる系譜でみてもわかるように、いつも「悪たれた heroine」が好きである。Steinbeck はこの作で大衆作家の一人になつたと考えてもよいであろう。

(19) *Sweet Thursday*, 1954

この作は Steinbeck によれば play form の comedy である。*The Palace Flophouse*, *The Bear Flag Cafe* などとも呼ばれていた。これは *Cannery Row* の続篇とか後篇とか便宜的にいわれているが、人物や場所が *Cannery Row* に戻り、Doc のためにパーティーを催そうとする仲間の努力というような同一の筋を用いる点は似ているが、この作はそもそも *Tortilla Flat* から来ているので本質的にはそれとは異つている。「*Sweet Thursday* で

Steinbeck は、*Cannery Row* に出てくる乱暴で評判のよくない、しかも愛すべき人物へわれわれを連れ戻す……*Sweet Thursday* は簡易食堂と淫売宿におけるひどく放ラツ(埒)で耻知らずで衝動的な世界の友情とシ(嗜)好がいたるところに見られる¹⁶⁴」。

この作は批評家や書評家には一大落胆を与え、あるものは最早 Steinbeck が重要な作家でなくなるのではないかと予言したほどであった。*Cannery Row* を愛好した Steinbeck のファンは、このような愉快でとりとめのない *Sweet Thursday* を読みたいと思うかも知れないが、批判的な読者は Steinbeck が最早真剣に取上げられる作家ではないという新しい証拠をこの本に見出したのである。この作は *Tortilla Flat* や *Cannery Row* などの作風に一応は逆戻りしたような印象を多くの批評家に与え、楽しい芸術的風格がないではないが、それは単なるベストセラーであることに間違はない。そうかといつて是非とも読みたいと思うようなものではない。これは現代的な音楽喜劇として書かれたもので、大作の文学作品に対して用いられる形式ばつた分析を行うことは無益であるが、これが拙劣な小説であるからといって、そうむきになる必要はない。この作で看過してはならないことは、個人の象徴の取扱いの中で、注意力のチ(馳)緩と放棄が明らかに示されていることである。これはもちろん *Burning Bright* にも見られるが、そこでは無責任な感傷性として目立つており、*East of Eden* では形体の崩壊となつている。

the Rodgers and Hammerstein はこの作を翻案して *Pipe Dream* という musical とし、1955年12月19日 Sam S. Shubert Theatre で上演し好評を博した。Bear Flag の新しいマダム Fauna の役は Helen Traubel が演じた。しかし、短期間の成功で終つてしまった。

(20) *The Short Reign of Pippin IV, 1957*

この中篇小説は a fabrication という副題がついている。退職に間もない中年の天文学者 Pippin (彼は好いかげんな科学者でしろうと天文学者である) は突然選ばれて、なかなか治めにくいフランス人を統治するようになるのであるが、この男と、彼の十代のグラマーむすめ Clotilde とその情人であるアメリカ人 Tod (彼は California の Petaluma のたまご王のむすこである) と、年老いた貴族、美術商人、守衛、庭師、政治家、平民などといった種々雑多な人びとについての物語であり、政治への関心とフランスから直接得た知識とで書かれたものである。この愉快でばかばかしい「うたかた太平記」(中野好夫氏)の大筋は次のようなものである。主人公の Pippin Arnulf Héristal は Paris で妻とむすめと平和な生活を送っている。そのころ内閣の失政から王政復古となり、はからずも彼は皇帝になることに決まる。かくて彼の一家は Versailles 宮殿に住む身となる。古風な戴冠式が終つて彼の統治が始まるとフランスは榮えてゆく。彼は統治者としての息苦しさを美術商である Charlie おじさんのへやでわずかにいやしている。むすめは Tod と恋をささやく……しかし、幸運の夢ははかなく消えることになる。王政が崩壊したのである。各地に暴動が起り、やがて再び共和国が誕生する。Héristal はなつかしいもとの住居に戻つて行く、というのである。

Steinbeck はまだ大学生のころ *The Stanford Spectator* や *Stanford Literature* に短篇小説や詩を發表したことがあり、1935年には *Monterey Beacon* に八篇の詩をのせたこともあつたが、いずれも時事問題をフウ(諷)したものであつた。Steinbeck は *The Short Reign of Pippin IV* で時事問題に再び立戻っている。*Burning Bright* 以降の Steinbeck の動きを追つてきた読者はこの作を読んでも何らの衝撃も受けなかつた。彼がはつきりとジャーナリズムに転向していることは、*How to Fish in French*¹⁶⁵ とか *Vegetable War*¹⁶⁶ などを読み

ば一目はつきりする。彼は本格的な作家である自らを棄てたとしか考えられない。これまでの彼の面目は探さなくてもいいが、この作は金もうけのために書かれたものにすぎない。この作は a very special book that would have an extremely limited audience である、と彼は C. V. Wicker にあてた手紙の中で述べているといわれるが、多くの批評家の言うように、これは人を楽しませる以上の何物でもないグウ(寓)話であることに間違いはない。現代フランスの病弊に対するフウ(諷)刺も、いたずらに pontifical なものになり果てて生気がない。人間的に真実なものと、人間的に途方もないものを結合させて喜ぶ彼のユーモアもここでは色あせている。 *Sweet Thursday* やこの作が Steinbeck 衰退の証明書でもあり、寂しくも響く挽鐘の音でもあろうか。P. Lisca もこのような見方をしているが、W. French はこの作に、よりよき次の作へのそれとない変化がある、¹⁶⁷と言っている。

(21) *Once There Was a War, 1958*

Steinbeck は 1943年 6月から12月まで New York の *Herald Tribune* の特派員として 歐洲戦線に行き交戦中の軍隊に親しく接しようと思つた。これは戦争小説を書くためであつたらしい。しかし彼は too disheartened by what he had seen of the war to prolong the experience in any way and he decided not to publish it ¹⁶⁸であつた。彼が故国に書き送つた通信文が始めてまとめて出版されたのが *Once There Was a War* である。これは短篇小説の形体をもち、彼が日ごろ human interest と呼ぶものを強調し、F. O. Matthiessen の評した freshness of observation をもつてつづられている。Steinbeck の戦争観は一言にして言えば客観的観察的である。

(22) *The Winter of Our Discontent, 1961*

Steinbeck のこれまでの作品は主として西部を舞台にし、下層社会の無学な人間を通してさまざまなテーマを取扱つてきたが、この作は彼の関心が東部にもあることをはつきり示している。この作についての数少ない評論の中では、F. W. Watt が1962年に発表した著書 *Steinbeck* ¹⁶⁹で論じているものが instructive に思われるので次に紹介したいと思う。

この作は *East of Eden* 以後の最も野心的な小説である。この作にはバク然としてはいるが *East of Eden* 中に見られる欠陥の大部分がある。すなわち、ぎこちなく押し付けがましい象徴主義、ムードの雑然とした混乱、幻想と現実主義の入りまじつた好いかげんな筋運びなど。しかし、長所と目されるのは中心人物 Ethan Allen Hawley の身边にただよう強烈ではあるが思い通りには実現されない誠実さという微妙なフン(霧)囲気である。Ethan はかつては誇り高かつた New England のある家族の出であるが今は貧しい生活を送っている。前作との主要な相違点は、Ethan が開放的の自己啓示的であるにもかかわらず、決して人を得心させることのない第一人称の説話者になつているということと、作中に出てくる New England の町やその町民とその生活や歴史などは、Steinbeck の後期の小説の専門家的な手腕や制御力にもかかわらず Adam Trask (*East of Eden* 中の人物) のいる西部の世界にくらべると活気がなく信頼性も乏しいということである。

Adam Trask の場合もそうであるが、Ethan の精神的経験は筋の中に出てくる出来事とは十分な関連性がない。Ethan の正直、名誉、愛情についてのひそやかな思いまどい、少年時代の思い出や迷信、親しみのない不安な夢の数々などが、この小説に主動力を与え、またその独特なフン(霧)囲気を作つているが、このような Ethan は、ひょうきんで女房にあまい Ethan、社交的人気の衰えに腹を立て、銀行を襲つたり、利得のために友人や自分の雇主

を裏切つたりして (*Judas* や *Richard III* をもじっている) 家族の財産を回復しようとたくらみ、欲心、不正直、不実という病気が自分のむすこやむすめに感染するのを見ると、結局は道徳の急激な反動に悩む Ethan とは不思議なほど無関係である。

この作にまたしても出てくる象徴主義は一貫性を持たせるように意図されている。特に理想主義と背信の象徴は聖書 (Ethan は受苦日に取りつかれている) と Shakespeare の悪魔的な *Richard III* (この劇の皮肉な独白からこの小説の表題は出ている) とアメリカの愛国的な歴史から取られており、私的な徳義と公共的な徳義、受苦日と7月4日、Ethan 自身ならびに現代アメリカの墮落と腐敗などが Ethan の包容力の大きい精神の中で関連的に説明されている。しかし究極的効果はむしろ二重に現わされるのであつて、Ethan とは本当はどんな人間であるのか? 彼はどんなに賢明であるのか、それともどんなに愚かであるのか? われわれはいかに本気で彼を考えるべきであるか? という質問となる。Steinbeck は以前は決して第一人称の説話を用いたことはなかつたし、彼の作を解く困難性の原因は、彼が Ethan の愚行の中でではなく、そのエイ知の中で、自身を “I” と全く同一視できることに気付いたということのように思われる。それ故に Ethan の受ける誘惑や純潔喪失はわざとらしくて読者を信服させるものではない。

Steinbeck は *Cannery Row* を mixed-up book¹⁶¹ と呼んだが、この作はなおさらそうである。しかし、この作の一見なめらかな表面の下には、新しく、波立ち、動く方向のはつきりしない力の意識がある。この力は、古い基盤に立つての創作に対し、あるいは例の long valley による束縛に対する Steinbeck の拒否をいくぶんは正当化するし、理解と表現に対する不断のものがきを表示している。というのは、60才現在のこの精力的で決然たる多作的な作家は、いまだに自分の言いたいことを言つたという証拠を見せてはいないからである。1956年もおそいころ E. W. Tedlock, Jr. と C. V. Wicker の編集になる *Steinbeck and His Critics, A Record of Twenty-Five Years* という評論集に接した時彼は皮肉と簡潔とをはつきり取りまぜながら次のように述べている。「この著作を見てもらえば、わたしがこれにどれほど時間をかけたかがおわかりでしょう。いやはや、わたしは何百年の間ペンをとつていたとでも言うのでしょうか。しかし、この作は古いもの、完成したもの、固定したもの、そのいずれであるともわたしは感じていないことは断言できるのです。今度の本が何らかの型を持つことにはなるでしょうし、目下構想中の二冊の本も不可避的な流れの方向にただよつて行くことでしょう——しかし、わたしにとつては、この二冊の本はどこにも見られないほど新しく、また独特なものであり、最初の作を書き始めた一千年も前と同じほど、びくびくしたり、鼻を高くしたり、控え目であつたりしているのです。さて今度の本は最初の作と同じほど骨の折れたものであり、昔と同じような興奮にとらわれています。水平線は近付けば遠くへとび去つてしまうものです。創作は勉強すればするほど信じられないほど困難なものになります。わたしは自分の技能——それがどんなものであろうと——については19才の折と同じほど知つていたらと心から願つていますよ。しかし、どんな新しい試み——それはどれほど人をびつくりさせるものであろうと——にも驚嘆と希望と喜悅はあるものですよ」¹⁶²

以上のように F. W. Watt は論じているが、いずれにしても、Steinbeck は富裕で生れのよい階級の人びととその人びとの持つている良い伝統の立場から、政治の、ビジネスの、あるいは個人の生活などの場における道徳心と誠実さの欠除を痛撃しているが、このようなテーマは作者の社会性への関心の強さを示すものである。

なおこの作はアメリカの Literary Guild や Reader's Digest Club や Book-of-the-Month Club などの推薦書となっている。

(23) *Travels with Charley, 1962*

20世紀に入つて25年の長い間 Steinbeck は変化してやまないアメリカについて多くの著作を書いてきたが I was writing of something I did not know about, and it seems to me that in a so-called writer this is criminal.¹⁶³ と反省し、更にはつきりと I had not felt the country for twenty-five years¹⁶⁴ と書いている。この怪物のような国、その話し言葉、その草や木や下水のにおい、光の色や質、国民の脈ハク(搏)などとの接触が十分でなかつたことをいつも気にしていたが、それがこの作品となつて現われた旅行の動機であつたことは確かである。自国に対する自信を持ち、将来の創作に対する資料集めのためにもと、Charley と呼ばれるフランス生れの、年老いてはいるが mind-reading¹⁶⁵ で有名なむくいぬ——このいぬは Paris の郊外で育つた紳士然たるいぬで Charles le Chien が正式な名であつたが Charles の愛称 Charley で通つていた——をつれ船舶用の小さなケビンをそなえ、Rocinante——これは Don Quixote が乗つたやせ馬から取つた名である、と Steinbeck は言つている——という4分の3トンの積みの古ぼけた間に合わせのトラックに乗つてアメリカ再発見の旅に出た。この旅の目的は副題の *In Search of America* から、また I came out on this trip to try to learn something of America.¹⁶⁶ という彼の言葉からも明リョウ(瞭)である。

Steinbeck がどんなに旅行好きであつたか、また旅というものをどのように考えているかを知るために、この作の冒頭に掲げられた一文を記してみたい。

まだ小さかつたころ、わたしはどこか知らない所へ行きたくてうずうずしたことがあつたが、おとなになればそんなことはなくなるものだ、とよく言われたものである。自分がおとなになつてみると、そういう気持の起こらなくなるのは中年であろうかと思つた。さて中年になつてみると、もつと年をとつたらそんな熱病はしずまるであろうと信じた。ところが今やわたしは58才、これでは老衰でもしなければそんな気持はなくならないうであろうというわけである。船の汽笛がボウボウと四回も鳴れば、今でもわたしのえりもとの毛が逆立ち、足も踏みならしたくなる。次第に加熱されるエンジンから出る噴出ガスの響、いや舗装の上のティ(蹄)鉄のパカパカいう音を聞いてさえ身内がぶるぶるし、口はかわき、目はうつろ。手のひらは熱し、胃が胸の中でうずく。これでは昔とちつとも変つてはいない。すずめ百まで踊りを忘れかねだ。

落ち着きなさのビールスが気ままな男に取りつき、旅先の道が広々してまつすぐで気持がよさそうだときは、この患者は旅に出るまことしやかな理由を見つけ出さねばならなくなる。ところがそんなことは、世事にたけたなまけ者にとつてはわけのないことである。理由などいつだつて考えてあるのだ。次にこの男は時間と場所の計画を立て、方角と目的地をえらび、手落ちのないようにしなくてはならない。どうやつて行くか、何を持つて行くか、どの位日数をかけるか?このような段取りはだれの場合にも同じであり、いつまでも変りはない。わたしはのらくら者の仲間入りをしたばかりの人たち、たとえば、まだうぶな罪意識しか持たない十代の人たちのためにこのことを書きしるし、そんな連中が初めて考え出すものではないと知らせてやりたい。

さて旅行が計画され準備され手順がふまされると、新しい要因が入りこんでくる。一周旅行、狩猟旅行、探検旅行などは他のあらゆる旅行とは異つて一つの実在 (entity) である。それ

には性格、気質、個性、独自性がある。旅行というものはそれ自体で一個の人間であつて、それに似たものは他には有り得ない。しかもどんな計画も保護も制御も強制も無益である。われわれは何年か努力すれば、われわれが一周旅行をするのではなく一周旅行がわれわれをつれて行くことを知る。旅行に慣れた人も、どうしてもやらねばならない旅行の予定も予約も一周旅行の性格を知ればどうにもならなくなる。このことが確認される時だけ、のらくら者も気をゆるめて一周旅行と一緒に出かけられる。そんな時だけは失敗もしなくなる。こう考えると旅行は結婚のようなものである。旅行を自分の思い通りにしたいという考えこそ旅を誤らせること必定である。こう書いてきてわたしはよい気分である。もつともこのことは旅を経験した者だけが理解できることではあろうけれど。¹⁶⁷

このようにして旅に人格を認める Steinbeck がとつたコースは Long Island から Main へ、中西部を経て Chicago へ、Minnesota, 北 Dakota, Montana —— 彼はここがすっかり気に入つてしまつた ——, Idaho を通つて Seattle, San Francisco, Salinas へ, Mojave, New Mexico, Arizona を経て Texas, New Orleans へ, 最後は Alabama, Virginia, Pennsylvania, New Jersey を経て New York へ, となつており, 氣息エンエン(奄々)とした Rocinante に手を焼きながらもアメリカの40州を回つたのである。

毎度のことであるが, Steinbeck はこの旅行記でも関心の中心は人間であつた。いたる所に展開されるその土地の繁榮と成長 —— Everywhere frantic growth, a carcinomatous growth¹⁶⁸ —— に驚きながらも, 人間性をゆたかにしてくれる自然性の破壊に気を悪くし, 物質文明の進歩を肯定しながらも I wonder why progress looks so much like destruction.¹⁶⁹ とにがにがしく思い, 路傍や林間に休んでは曇りがちな胸のうちをいやしたこともいくたびかあつた。広バクとした平原やひなびた村や高くそびえる山や緑の牧場は彼にほほえみかけるように思われた。そんな時彼は急に元氣付いて旅のうさを忘れ, アメリカの正体探求の旅を続ける勇気をわき立たせるのであつた。アメリカの南北東西にわたつての旅行によつて彼が知り得た正体は exact で probable なものであると彼ははつきり考えた。彼はこう言つている。For all of our enormous geographic range, for all of our sectionalism, for all of our interwoven breeds drawn from every part of the ethnic world, we are a nation, a new breed.¹⁷⁰ 人間を愛する彼が, アメリカ国民が a new breed であることを認識し直し得たことは大きな収穫であつたと言える。また彼はすべての人が —— 皮膚の色や血統の相違を越えて —— 自分の国の人であることを更めて痛感し, From start to finish I found no strangers ... These are my people and this is my country. と書いているが, この一事だけでもこの旅行の目的は達せられたと言つてよい。... many a trip continues long after movement in time and space have ceased.¹⁷¹ と述懐する Steinbeck, 放浪にも似た旅を愛し, 各地で各様各種の名もない人びととの出会いに心をおどらせた Steinbeck, 黒人の人間的価値を強調してやまなかつた Steinbeck の脳裏にはこの旅はいつまでもいつまでも焼き付けられるであろう。

Steinbeck ほどの批判的洞察をまじえた非常な愛情で, アメリカという国やその国民が吟味され, それが公けにされたことはこれまでなかつたと言つても言いすぎにはならないであろう。

注

- 142 F.W.Watt: *Steinbeck*, p.14
 143 John Steinbeck: *The Log from the Sea of Cortez*, p.viii
 144 *ibid.*, p. lxxvii
 145 Peter Lisca: *John Steinbeck: A Literary Biography* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker :
Steinbeck and His Critics, p. 19)
 146 *Genesis*, IV,16
 147 Peter Lisca: *The Wide World of John Steinbeck*, p. 273
 148 Robert E. Spiller: *The Cycle of American Literature*, p.290 (P.Covici にあてた手紙)
 149 E.W.Tedlock and C.V.Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p.XXVII
 150 148 と *ibid.*, P.219
 151 147 と *ibid.*, pp.259-260
 152 W.M.Frohock: *The Novel of Violence in America*, p.141
 153 147 と *ibid.*, p.264
 154 *Herald Tribune* (Bantam Books 本の裏表紙)
 155 *Punch*, 22 (August 25, 1954)
 156 *Saturday Review*, 39 (July 21, 1956)
 157 Warren French: *John Steinbeck*, p.165
 158 *ibid.*, p.27
 159 *The University of Toronto Quarterly* の編集者, University College と University of Toronto
 の英語の準教授
 160 142 と *ibid.*, pp.102-104
 161 *The Portable Steinbeck*, p.xxvi
 162 149 と *ibid.*, p.308 (これは1956年12月7日 Dickey にあてた手紙)
 163 John Steinbeck: *Travels with Charley*, p. 5
 164 *ibid.*, p.5
 165 *ibid.*, p.11
 166 *ibid.*, p.125
 167 *ibid.*, pp.3-4
 168 *ibid.*, p.162
 169 *ibid.*, p.162
 170 *ibid.*, p.185
 171 *ibid.*, p.243

Ⅲ 略 伝

- 1902年 2月27日 California の Salinas に生まれる。父はドイツ系で John Ernest Steinbeck。
 Monterey 郡の会計係。母はアイルランド系で結婚前の名は Olive Hamilton。Salinas Valley
 の公立学校の先生。
 1918年 Salinas High School 卒。
 1919年 Stanford College 入学。

- 1925年 同大学中退。19年から25年までの間大学に通ったのは9カ月位。この間牧場で働いたり、道路普請をしたり、テンサイ（甜菜）工場で技術者として夜間勤務したり、*A Lady in Infra-Red (Cup of Gold)* として1929年出版）を書いたりする。
- 1926年 Stanford を去り、11月作家を志して New York に出る。そこでは労働者、*American* 紙の探訪記者などをしながら短篇小説を書く。しばらくして California にもどり Lake Tahoe で土地の管理人をしたり魚のフカ（孵化）場で働いたりする。
- 1930年 Carol Henning と結婚。Pacific Grove に住む。Edward F. Ricketts と知り合う。3万語にもおよぶ原稿 *Dissonant Symphony* と、食料品店への仕払いのためのスリラー物の原稿 *Murder at Full Moon* を書いたが出版は断念する。
- 1932年 夏 Los Angeles の Eagle Rock へ移る。11月の終りごろ Mexico 旅行の計画を立てたが果たさなかった。冬には Pacific Grove へもどる。そこで *To a God Unknown* の原稿完成。*Tortilla Flat* を書き始める。
- 1933年 *Dissonant Symphony* の原稿破棄。
- 1936年 Los Gatos に家を新築。
- 1937年 春 San Francisco を立ち New York へ旅行。そこでは Thomas Mann のために設けられた晩餐会に不承々々出席。5月 England へ、そこから母の生地 Ireland へ、更に Sweden, Russia へ旅行。6月父死去。9月 Mexico 旅行に出発、年末帰国。11月23日 *Of Mice and Men* New York の Music Box theater で上演。この年の若い著名人10人のうちに入れられる。
- 1940年 3月11日 Ed Ricketts と共に無セキツイ動物採集のため Gulf of California へ行く。自作の *The Forgotten Village* 映画化（翌年1月完成）の仕事のため Mexico へ。
- 1942年 Carol Henning と離婚。それ以後 Steinbeck は California には住んでいない。
- 1943年 Gwyn Verdon と New Orleans で再婚。春 *Herald Tribune* の特派員としてヨーロッパへ渡り10月まで滞在。
- 1945年 Manhattan に家を買う。
- 1947年 写真師 Robert Capa と共に Russia 訪問。American Academy of Arts and Letter に推薦される。
- 1948年 Ed Ricketts 自動車事故で死亡。Gwyn Verdon と離婚。1950年5月まで Viva Zapata (1952年からは Twentieth Century Fox と改名) のために *The Red Pony* から取った物語と映画台本を書き自ら撮影の監督をやる。Robert Capa, Henry S. White, Phil Reismanらと共に Word Video 協会をつくり、文学的なショーやフィルムをテレビに供給する仕事をやる。
- 1950年 New York に出 McIntosh and Otis 出版社の事務所に止宿。Elaine Scott と New York で結婚。
- 1952年 ヨーロッパへ。イタリーでは戦争犯罪やバクテリア戦を奨励したアメリカ人として共産主義者から非難されたため公開の反論を *L'Unita* に送ったが没収される。*Il Tempo* に送ったものは全文がのせられる。*Collier's* へ報告文を送る。
- 1957年 国際 P. E. N. 大会に出席のため東京へ行く。
- 1962年 10月25日アメリカ作家としては6人目の Nobel 文学賞授賞者となる。